第1章 戦場

シベリアでの捕虜生活

鼻も凍る寒さの中での伐採作業

堤 繁雄さんのお話から

私は、三つのふるさとを持っています。樺太と、東京の浅草、そしてこの白石区です。

私は、大正十五(一九二六)年に樺太で生まれて、留多加の小学校に入りました。日本中が不景気で、寒いところでも上履きを履けない子や、弁当を持ってこられない子どももいました。

それから父親の転勤で東京に行きました。中学校に入ると、千葉県の習志野まで夜に行軍をしました。両国を夜六時ごろに出て、習志野に着くのは朝の明るくなったころです。その間は、昔の鉄砲を担ぎます。学生も、弾を込めた鉄砲を担いだのです。

東京が最初に空襲を受けたのは昭和十七(一九四二)年です。アメリカが航空母艦に飛行機を乗せて、そこから東京、名古屋へ第一回目の空襲をしました。私も初めて空襲を体験しました。

そして昭和二十(一九四五)年三月十日に東京大空襲がありました。亡くなられた方が周辺の道に山となり、血潮が川となって流れていくぐらい無残な状況だったと浅草寺に建っている碑は語っています。その頃の日本には飛べる飛行機はありません。燃料もないし、操縦士がもういないのです。アメリカの飛行機は、日本の飛行機がいなくなり、高射砲という飛行機を迎え撃つ大砲が減ってくると、人々の頭上に飛んできました。

東京大空襲の後、私は徴兵検査のために、優先的に切符をもらって樺太に帰り、大泊の近くで軍隊に入りました。第八十八師団、連隊砲中隊です。第八十八師団は、ソ連が攻めてきそうだということで昭和二十年三月に急いでつくった師団です。

そして八月九日にソ連は日本に対して戦争をすると布告してきたのです。私のいた真岡にも

○行軍　軍隊が隊列を組んで移動・行進すること。

○高射砲　敵の航空機の攻撃から護るために作られた大砲。帝国陸軍では、高射砲、帝国海軍では高角砲と呼んだ。

軍隊が攻めてきました。

私の隊は、敵の戦車を吹き飛ばすための爆弾を背負う訓練をしていました。兵隊一人一人が背中に爆弾を背負い、壕を掘ってソ連の戦車が来たら、その下に飛び込むのです。そういう訓練を毎日続けました。訓練のときも死んで当たり前で、生きて帰られるなんてとんでもないのです。二度と家族と会えないという覚悟で出征するのです。私の連隊では非常に重たい大砲を馬が引っ張るので、馬を大事にしていました。軍隊にとっては、人間より馬の方が大事であるように思いました。人間はどこからでも連れてこられるけれど、馬は生産して育つまでに時間がかかるからではないでしょうか。

八月十五日に、天皇陛下のお言葉による戦争は終わりますというラジオ放送を聞きました。ラジオの前に直立不動で立っていました。しかしその後も、真岡あたりにソ連が来て、千名の日本人が亡くなりました。私たちは大泊に集結して、武装解除をしました。持っている武器をソ連に差し出すのです。これはみじめでした。

イメージ図

シベリアでの伐採作業

湾内にはソ連の軍艦がびっしりと張りついて、なかなか日本に帰ろうという話になりません。九月に入って、大泊(おおどまり)で作業隊を組まされて、やっと「あなたたちを日本に帰します」と言われたときにはうれしかったです。

ところが、船に乗せられて航行しているうちに、船の向きが北向きに変わりました。私たちは北樺太の土地に入ったのです。

私どもはいろいろなところに分かれました。ソ連の収容所は第五百二十五収容所まであり、一番大きい所は四万五千人収容です。オハは北樺太では大きな町で、私は第二十二収容所に収容されました。ここは三千五百人ですが、狭いところですから、三千五百人が分散していました。

後でソ連の人に聞きますと、作業の一番きつい残酷(ざんこく)なところでした。「セルモーオジョラ」といって「七つの湖」という意味の美しい名前なのですが、作業は過酷(かこく)な伐採(ばっさい)です。作業は二人組みになって、ロシア語で「タポール」という斧(おの)や、「ピラ」という両方に柄がついたのこぎりを引き合って木を切るのです。私も初めて木を切ることになりましたが、最悪の労働でした。

日本の杉などは上から下まで大体同じ太さです。ところが向こうは寒いから、同じ松でも、上はスッと細いけれど根元は三倍ぐらい太いのです。我々は、根元の一番太いところを切らなければならなくて、しかもとても堅いので大変なのです。

札幌でも、たまに寒い日は空気中の水蒸気が凍ってひらひらと降りますが、オハでは十一月から五月まで毎日そういう状態ですから、凍傷(とうしょう)にかかりやすいのです。また食べ物も豊富ではありませんでした。

私たちは三交替で木工場へ行きますが、夜十二時に行って朝八時に帰るときは、太陽が上がる時間で一番寒いのです。耳も何もかも凍ってしまうのです。収容所まで約一時間歩いて帰るの

ですが、一番気にしていたのは自分の鼻です。片目で鼻を見ながら歩いていると、ちりちりと白くなるのですが、手で覆うと、また解けていきます。自分の鼻が白くなって、そのままの状態だと何ともありません。しかし、収容所の室内は暖かいので、凍傷のまま中に入ると、腐ってポロンと落ちてしまうのです。ですから部屋に入る前に自分の息でしばれている鼻を元に戻すのです。手で押さえてハーと息を吐くのです。お腹はすく、外は寒い、でも鼻がなくなったら大変ですから、必死の思いで息をしながら鼻を守るのです。凍傷にかかると治らないのです。たとえば、手が凍傷になると、壊疽で腐っていくので、手首から切ってしまうのです。これが凍傷のおそろしさです。

そして昭和二十四(一九四九)年十月に舞鶴に帰ってきました。私たちが舞鶴で最初にされたことはアメリカによる調査です。ソ連の軍事施設や飛行場はどこにあるのか、石油のパイプラインはどこを通っているかなどと聞かれました。私たちは聞いてもわからないと答えるのですが、何かを話して、米軍直轄の沖縄に飛ばされたらどうしようと心配でした。舞鶴にいた三日間は、いつまた名前を呼ばれるかと戦々恐々とし、汽車に乗って初めて「ああ、日本に帰ってきたのだな」という実感がわきました。

戦争は残酷です。まだ多くの仲間、戦争で亡くなった方の遺骨が、暑い南方や、寒いシベリアでまだ眠ったままで、日本に帰れないのです。戦争を美化してはいけません。

皆さん方は、この平和な日本にお住まいなのですから、二度と悲惨な戦争を起こさないように、これから頑張ってください。

DATA

平成23年度白石区平和事業
聞き取り
・平成23年10月21日
・本通小学校

堤　繁雄(つつみ・しげお)さん
・大正15(1926)年生まれ
・札幌市白石区在住